上野国分寺が建てられた場所

上野国分寺は榛名山の東南麓、国の支配を行う役所である国府の北西の地が選ばれ、西に僧寺、東に尼寺が並び建てられました。この地は上野国のほぼ中央に位置し、西に妙義・浅間、北西間近に榛名、北に小野子・子持、北東に武尊・赤城の山々を望め、南から南東にかけては視界をさえぎることのない平野が広がる絶好の場所です。「「好処」を選んで長く久しく保つように」との詔のとおり、今でもその景観を感じることができます。

周辺には大規模古墳群（保渡田古墳群・総社古墳群）や豪族居館跡（三ツ寺Ⅰ遺跡・北谷遺跡）など古墳時代の重要遺跡のほか、古代の有力寺社（山王廃寺跡・総社神社）、中近世に地域の拠点となった城館跡（蒼海城跡・前橋城跡）などが分布します。この地域は古墳時代以来、上野国の政治・文化の中心地でした。

交通のご案内

○徒　歩　ＪＲ上越線群馬総社駅または新前橋駅から約 3.5km

○バ　ス　・群馬バス前橋駅発イオン高崎行 妙見参道下車北へ徒歩５分 ・関越交通バス前橋駅発金古王塚台団地行 妙見前下車北へ徒歩７分
・高崎市内循環バス「ぐるりん」箕輪城線 上野国分寺跡前下車

○自動車　関越自動車道前橋インターチェンジから約 10 分・駒寄スマートインターチェンジから約 15 分
・ＪＲ高崎駅から約 30 分・ＪＲ新前橋駅から約 15 分・ＪＲ前橋駅から約 25 分
駐車場は史跡地の南方、西毛広幹道からアクセスする「天平の道駐車場」をご利用ください

ガイダンス施設「上野国分寺館」のご案内

ガイダンス施設には発掘調査成果の紹介とともに、1/20 の大きさで復元した七重塔の模型などを展示しています。また、解説ビデオなど映像資料もあります。解説員が常駐しており、いつでも説明を受けることができます。入場は無料です。ぜひ、お出かけください。

・開館時間　午前９時 30 分～午後４時 30 分（入館は午後４時まで）
・閉 館 日　年末年始（12 月 29 日～１月３日）
・問合せ先　群馬県地域創生部文化財保護課　027-226-4684
ガイダンス施設「上野国分寺館」　027-372-6767

令和３年２月 22 日改訂

史跡上野国分寺跡

National Historic Site Kouzuke Kokubunji Temple Ruins

上野国分寺とは

天平 13 年（741）、聖武天皇によって国分寺創建の詔が発せられました。仏教の力によって災害や疫病、外敵を防ぎ、五穀豊穣を祈ることで国の安泰をはかる鎮護国家思想に基づくものでした。寺は国分僧寺と国分尼寺の二寺制とし、国分僧寺は「金光明四天王護国之寺」として七重塔を建て、金字で書写した護国経典である「金光明最勝王経」を安置しました。地方において、これまでにない高層建築物である七重塔を備えた国分寺は、まさに「国の華」でした。

年代	主なできごと
538〈欽明７〉	百済国より仏教が伝わる（仏教公伝）
７世紀	愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳（前橋市）が造られる
（後半）	山王廃寺（放光寺と推定）（前橋市）が創建される
681〈天武10〉	放光寺の僧長利が亡き母のため供養碑を建てる（山上碑・高崎市）
701（大宝元）	大宝律令が定められる
711（和銅４）	多胡郡が建てられる（多胡碑・高崎市）
726（神亀３）	三家氏が信仰集団を結び、先祖供養と一族繁栄を祈ることを誓う（金井沢碑・高崎市）
741（天平13）	聖武天皇により国分寺創建の詔が発せられる
743（天平15）	聖武天皇、大仏建立を発願
749（天平勝宝元）	碓氷郡の豪族石上部君諸弟と勢多郡の郡司上毛野朝臣足人が上野国分寺の建立に協力したことにより外従五位下の位を授かる
752（天平勝宝４）	東大寺で大仏開眼供養が行われる
801（延暦20）	僧道輪が石造の宝塔を造立し、写経した経典を納める（山上多重塔・桐生市）
817（弘仁８）	最澄が東国伝道の途中、上野国の緑野寺（藤岡市）に滞在し民衆を教化
818（弘仁９）	上野国など坂東諸国に地震がおこり大きな被害を受ける
939（天慶２）	平将門が上野国府を占領し、国司を追放し新皇と称す
1001（長保３）	このころ上野国司平重義が十一面観音像を造立し国分寺金堂に奉納
1030（長元３）	このころまでに築垣・門などの外郭施設、僧坊などが失われる
1108（天仁元）	浅間山が大噴火し国内の田畑壊滅と伝えられる。上野国分寺にも軽石が降り積もる
14 世紀後半	このころ講堂付近は墓地となる

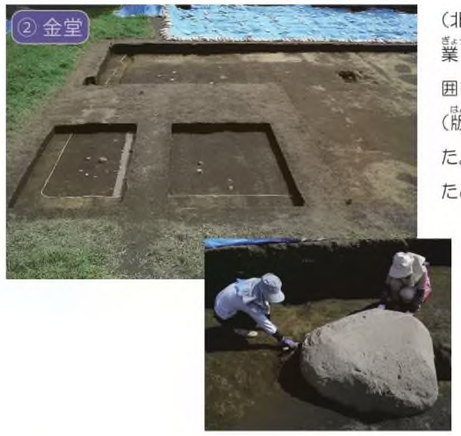
上野国分寺の創建に関しては、奈良時代の史書『続日本紀』の天平勝宝元年（749）に、碓氷郡と勢多郡の豪族が国分寺の造営に協力したとして上位の位階を得た記載があり、国司が主宰した造営に地元の豪族層が協力したことがうかがえます。また、長元３年（1030）の上野国司の交替に際して作成された「上野国交替実録帳」からは衰退期の様子を知ることができます。これには破損の状況と無実（滅失して実体のない状態）のものが列記されていて、築垣や南大門などの諸門、萱葺僧房などが壊れて無くなり、釈迦三尊像をはじめ多くの仏像が破損している状況が記されていますが、塔や金堂・講堂はまだそびえていたと推定されます。しかし、14 世紀代には講堂が墓地として利用されていることから、少なくともこの頃までには創建以来の伽藍は無くなってしまったと考えられます。

このように、史跡上野国分寺跡は発掘調査の成果だけでなく、文献史料からも当時の様子を知ることができて古代上野国の歴史を描くことができる、全国でも貴重な国分寺遺跡なのです。

発掘された上野国分寺跡

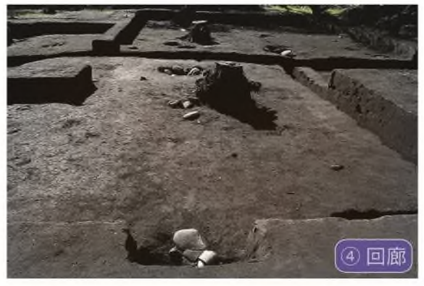
発掘調査は昭和55（1980）～63年度（1988）の9か年にわたる調査（第1期）、平成24（2012）～28年度（2016）の5か年にわたる調査（第2期）の、大きく2時期の調査が行われています。近年の第2期調査では、これまで不明であった中門・回廊の位置が初めて確認されたほか、100年近くにわたって金堂とされてきた建物跡の前面で本来の金堂が発見されました。その結果、上野国分寺は塔が回廊の外に置かれる伽藍配置であるものの、塔と金堂が東西に並び建つ特徴的な配置であったことが明らかとなりました。こうした伽藍配置の例は多くありませんが、陸奥・近江・但馬の国分寺で見られます。

（南から）3×2間の南北棟の掘立柱建物で、人が立っているところが柱穴の位置になります。奥の黒く見える土は版築層で、基壇建物から規模を縮小して掘立柱建物へ建て替えられたことが分かりました。梵鐘の重さに耐えられるよう柱間を狭めた可能性があるため、鐘楼と推定されています。



（北から）建物北東角部分の掘込地業（地盤を強化するため建物の範囲を一度掘り込んで固く埋め戻す（版築）基礎工事）が確認されました。南西部では耕作の邪魔になるため穴を掘って地下に落とし込まれた径130㎝の礎石も見つかっています。

（南から）東西50尺（15m、人のいる範囲）・南北40尺（12m）の掘込地業の全体を確認しました。中央を壊す堀の東斜面では、ずり落ちた礎石2個が見つかっています。回廊との取付きには東西ともに布掘地業（柱1列分を立てるための細長い掘込地業）が見つかりました。

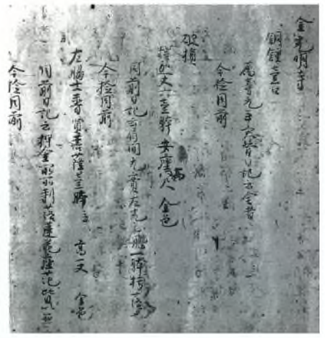


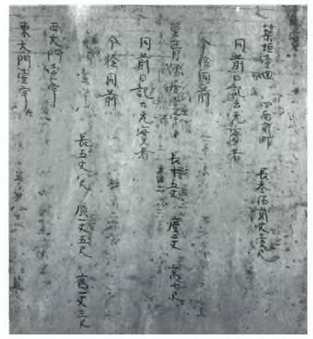
（北から）南東角にあたる、逆L字状に並ぶ内側柱列の根石（礎石の下にしく石組）列を確認しました。桁行は10尺（3m）等間です。内列と外列がそろって見つかった箇所がなく梁行は不確定ですが、西面で外側柱列の根石列が見つかっており、図上復元から15尺の単廊であった可能性が高いと考えられます。

（南から）東辺の礎石3個のほか、堀に落ちた礎石2個を確認しました。乱石積基壇の基壇縁と考えられる石列が2条あることから、建て替えが行われていると想定できます。これまで八脚門（三間の門）と考えられてきましたが、伽藍中軸線との関係から五間門であった可能性が高くなりました。

古代の記録に見える上野国分寺

長元3年（1030）に作成された「上野国交替実録帳」に、平安時代の「金光明寺」（国分寺）の状況が記載されています。「破損」と「無実」のものを列記したものですが、塔や金堂・講堂の記載が見られないことや多くの仏像が破損しているもののまだ健全な姿を保っていることから、これらは無実とならず残っていた可能性が推定できます。





復元された上野国分寺跡

第1期の調査研究成果に基づいて、平成2（1990）～5年度（1993）にかけて塔と講堂の基壇、南辺築垣の一部が復元されました。

七重塔を支えていた基壇です。心礎を含む15個の礎石と土壇の高まりが残っていました。礎石2個を追加し、基壇外装の切石を並べて往時の姿を復元しました。

初層の柱間は12尺等間で一辺10.8m、高さは60.5mあったと推定され、全国最大級の規模を誇りました。

8個の礎石と土壇の高まりが残っていました。金堂として復元されましたが、第2期調査で本来の金堂が確認されたことから講堂であったことがわかりました。

本来の基壇は、もう少し小さい規模で高さも2尺（現状3.5尺）であったと推定されています。

古代と同じく、手作業で棒でつき固めて土を積み上げる版築工法で復元されました。当時は寺の四周を囲っていたことが「上野国交替実録帳」に書かれています。1㎥あたり4tの重さがあります。空いている場所には南大門が建っていました。